

おいでん・さんそんSHOW

1月号
2018.01.04発行



2017年11月稲橋財産区の作業林道にて撮影。右から2人目が伊達剛さん、左端がトヨタケ工業㈱横田社長。

おいでん・さんそんセンターは今年度、移住プロジェクトに力を入れ、「いなかつ博覧会」の開催や、移住PR冊子「脈々」の発行などの取り組みをしてきました。昨年12月までに70名が空き家情報バンクを利用して移住しています。

移住・定住人口を増やすと同時に、センターが注目しているのが「関係人口」です。まだ一般的になじみのない言葉ですが、関係人口とは簡単に言うと「地域に多様に関わる人々」とのこと。山村地域が好きだけれど、移住はハードルが高い、移住するつもりはないけれど、定期的に通いたい。そんな人々を表すのが関係人口です。

明治大学の小田切徳美教授は関係人口を「農村に対して多様な関心を持ち、多様に関わる人々の総称」と定義し、日本農業新聞に「農村関係人口の可能性」というタイトルで寄稿されています。この中で小田切さんは、移住ばかりが目立っているが、実態を見れば、人々の農村への関わりは段階的であるとして、例えば①地域の特産品の購入②地域への寄付③頻繁な訪問(リピーター)④地域でのボランティア活動⑤準定住(年間



今回参考にさせていただいた関係人口の本『関係人口をつくる～定住でも交流でもないローカルイノベーション』(田中輝美・著2017)

自転車文化の普及を稲武で
伊達剛さん(だてつよし)の場合
NPO法人チャリンコ活用推

のうち一定期間住む、二地域居住)⑥移住・定住という「関わり」の段階」があると指摘しています。このことは、ローカルジャーナリスト田中輝美さんの著作「関係人口をつくる」定住でも交流でもないローカルイノベーション」の中でも紹介されています。

これまで、おいでん・さんそんSHOWでも度々取り上げてきたように、移住者が地域を元気にしている例は、豊田市の山村部でたくさんあります。しかし、住んでいなくても関係人口として地域の活力になっている例がすでにあるのではないかと調べてみました。今回、3つの例をご紹介します。

「コミュニティデザイナー山崎亮氏の講演を5年ぶりに聴く機会を捉えた。今年の全国過疎問題シンポジウムの基調講演、テーマは「縮充する地域を目指して」。

2017 第8回
縮充する地域

センター長の
ミライのフツツに
向かって!



「人口や税収が縮小しながらも地域の営みや住民の生活が充実したものになっていくしくみを編み出さなければならぬ時期を迎えている。それは、楽しく誰

もが参加するしくみであり、その向こうに日本の未来がある」という主張であった。

「人口減少・高齢化の先進地である過疎地域の皆さんが、地域をあきらめるなら、それは日本をあきらめるということだ」。定年退職を目前にした2012年の秋、新城市で開催された全国過疎問題シンポジウムで聴いた講演が、おいでん・さんそんセンター設立の引き金になった。そ

の講師こそ山崎亮氏だったのである。

拡大成長社会は、全てをお金の量で測る暮らし、人は必然的にお金を得やすい都市に集中した。迎える縮小社会は、経済優先の価値観の転換が図られなければ途方もない格差社会になる。自然とともに暮らす、土に生きる山村の生活は、人は自然の一部であること、支え合い、新しい幸せのかたちを教えてください。

る。山村は、人々に新たな価値観をもたらす温床となる。

都市と山村、人と人、地域と団体をつなぐ中間支援機関おいでん・さんそんセンターは、自治の復権のための機関。楽しく誰もが参加するしくみづくりこそセンターの使命であり、5年の歳月を経て、改めて山崎亮氏に励まされた気がする。縮充する地域、ひいては縮充する日本の未来を拓く新たな1年が始まる。

イベント情報

いなかとまちのくるま座ミーティング2018

見えてきた
ミライ
つないだ5年の軌跡

日時 2018年2月4日(日)
13:00-17:00(受付開始12:30)

会場 豊田商工会議所
豊田市小坂本町1丁目25

●内容:おいでん・さんそんセンターを開設して5年が経過しようとしている。中間支援組織として、都市と山村、人と人、地域と企業を結びながら様々な地域課題に向き合ってきた。それらは、拡大と成長の時代が私たちにもたらした豊かさの代償、過疎、格差、環境問題などだった。先進国に富が集中した時代が終わり告げ、人口減少、高齢化が覆うこれからの日本をどう創るか。少しずつ見えてきた安定と成熟の社会のミライ、共に生きる社会、地域自治のあり方をあなたは見つけることができるだろうか。

●日時:2018年2月4日(日) 13:00-17:00 (12:30受付開始)

●場所:豊田商工会議所

●スケジュール:◎第1部13:10~13:45基調報告【定員180名】◎テーマ『センター5年の軌跡一見えてきたミライ』◎講師:鈴木辰吉おいでん・さんそんセンター長◎13:45~14:15対談:澁澤寿一(しぶさわじゅいち)氏×鈴木辰吉◎第2部14:30~16:30くるま座談義【定員各30名】分科会①移住定住&地域スモールビジネス研究会◎テーマ『地域で違う!?移住のカタチ』/分科会②食と農分科会◎テーマ『中山間地農業は守れるか?』/分科会③次世代育成部会◎テーマ『子どもをど真ん中にした持続可能な地域づくり』/16:40~17:00まよめ全体の全体会◎登壇者:各分科会のコーディネーター等、太田稔彦豊田市長、鈴木辰吉◎第3部17:30夜なべ談義【交流会】定員90名◎場所:大割烹だるま◎参加費:5,000円

●参加申し込み方法:①チラシ裏面の申込票に記入してFAX送信②氏名、参加希望、電話番号、FAX番号、E-mail、郵便番号、住所、所属を記入の上、メール送信③センターHPから専用フォームで申し込み

●締切:1月26日(金)

●問合せ:おいでん・さんそんセンターTEL:0565-62-0610 FAX:0565-62-0614
E-mail:sanson-center@city.toyota.aichi.jpHP:http://www.oiden-sanson.com/



その他の情報は、センターHPをチェック!

REPORT



[いなか暮らし博覧会09]

『ここでしか聞けない』話ばかり

古民家リノベーションの苦勞をすべて見せます!!
ジビエカフェ、オープンまでの道のり



説明をする清水潤子さん(中央) ジビエカフェの外観

12月1日(金)に、築150年の古民家をリノベーションして猟師飯が食べられる山里カフェMuiがオープンしました。12月4日(月)、オープンしたばかりの古民家カフェで、古民家リノベーションの苦勞話や工夫された点を伺いました。案内人はカフェオーナーでしみずじゅんこ女性ハンターとして活躍している清水潤子さんと、リノベーションのお手伝いをされた

たなかしのぶ ホームドック・タイキの田中忍社長です。空き家を購入した経緯から始まり、改修では床下も、天井裏も、水周りも…と出てくる問題の山と向き合った経験談がありました。ご近居さんや知り合いにどれだけ助けられたかというエピソードも聞きました。また、ただの住まいとしてのリノベーションでは無く、ジビエカフェとして飲食業のお店とし

ての配慮など、さまざまな参加者の参考になるお話でした。そもそも、リノベーションとリフォームは何が違うのかというお話から、リノベーションに掛かるお金の話まで他では聞けない話で盛り上がりました。囲炉裏を囲んで、参加者も自己紹介から、移住計画や田舎暮らしへの想いや取組など話に花が咲きました。(西田又紀二)

REPORT



地元ゴスペルグループが圧巻のステージ

第3回北三河芸農祭開催



12月3日(日)、四季桜の咲く小原地区。真つ青な空のもと、第三回北三河芸農祭が、松月寺近くの広場で行われました。ステージでの出演者の中で圧巻だったのは、地元小原の「ゴスペルグループP」。会場の空気を震わせるようなソウルフルな歌声を響かせました。「仲間と共に楽しめる山里の暮らし」が表現された素敵なイベントでした。(木浦幸加)



ゴスペルグループのステージ

REPORT



[いなか暮らし博覧会12]

温かな雰囲気がお菓子教室

お山のお菓子工房でおやつ作り体験と交流会



お昼はカレーを食べながら情報交換した

12月7日(木)、旭地区にあるお菓子工房「すぎん工房」でかぼちゃマフィンとくるみクッキーを作る体験が行われました。1ターンした女性が、旧保育園を利用してオープンしたすぎん工房。農家の女性や、子育て中のお母さんが地元の素材を使い、素朴でしみじみおいしいお菓子を作っています。稲沢市や名古屋市など遠方から足を運んでくださった方に参加理由を聞いてみると、「新聞で、『車だけあって思った?』の豊田の田舎PRの記事を読んだことがきっかけ」との答え。プロモーションを経てのいなか暮らし博覧会開催の流れのなかで、きちんと興味がある方に届いたことをとても嬉しく思います。

お子さんも安心して参加できるアットホームな雰囲気でお菓子作りを習いました。焼けるまでの間にお昼時間になり、すぎん工房が定期的開催している『カレー研究会』で、持ち寄りのカレーをおいしくいただきました。足助、旭、小原など近くからの参加者もいて、山里暮らしの情報交換をして盛り上がっていました。

最後に感想を聞くと、「距離が遠かったが、来てみないとわからない良い印象を受けた。来てよかった」という声がありました。またアンケートには、「将来すぎん工房のある地域に住んでみたい」という答えもありました。(木浦幸加)



お菓子教室で作ったマフィンとクッキー

稲武地区のファンとして定期的に訪問
— 光岡真里さんの場合 —
名古屋在住で、普段はお勤めとサロン経営をされている光岡真里さん。春から秋にかけては1~2ヶ月に1度は稲武地区に通っています。きっかけは

後日横田社長を訪れ、稲武地区の自然環境の素晴らしさ、名古屋市や豊田市街地からのアクセスの良さに可能性を感じました。その後、地方創生の政策コンテストで、稲武地区をフィールドとして都市と山村を結ぶ自転車文化創出のための事業案を提出。その案が優秀政策賞を受賞し、現在トヨタケ工業(株)と協働で「イナプベースプロジェクト」を進行中。都市部の自転車愛好者らと稲武地区でマウンテンバイクトレイル整備をしたり、交流企画を行っています。

休日に森林整備
— 袋真司さんの場合 —
みよし市在住。トヨタ自動車(株)勤務する袋真司さんは、2013年から約1年間、豊森なりわい塾(トヨタ自動車、特定非営利活動法人地域の未来志援センター、豊田市による三者協

のづくりをしたり、自然と共生している人々の暮らしに憧れがあり、応援したいと思っています。」と話しています。
稲武地区のファンになり、どらぐり工房での講座に参加したり、ブルーベリー狩りや、カフェに名古屋の友人を連れて行ったリ、薦めたりもしています。
「魅力的な人とのつながり、も



光岡さん(右)と稲武地区に住む友人



仲間と共に間伐に取り組む袋さん(左端)



働事業を受講しました。そこで森林の課題について学び、人工林の間伐が進んでいない現状を目の当たりにしました。
卒業後、とよた森林学校主催の初級間伐講座に参加。修了後に「とよた旭七森会」という間伐ボランティアグループ(矢作川水系森林ボランティア協議会所属)を立ち上げ、休日に仲間と一緒に旭地区の山に入り、地域の方と関わりながら間伐を進めています。
「関係人口」の可能性
今年、おいでん・さんそんセンターは、移住をさらに推し進める活動と同時に、紹介した3人のように「移住しなくても、地域に関わる」関係人口の増加にも力を入れていきたいと考えています。関係人口を増やすことは、他の自治体と人口の奪い合いをすることなく、地域と、地域に関わりたい人をつなぐことができる可能性に満ちています。(木浦幸加)

REPORT



「あさひ森の健康診断」調査報告会

80名が参加し3年間の振り返り



17の調査チームが報告



会場の様子

12月16日(土)、2015年から3年間にわたって行われた「あさひ森の健康診断」の調査報告会が旭地区敷島会館で開催され、山主や森づくり会議代表、都市部の森林ボランティアなど80名が参加した。都市部の森林ボランティア中心で2005年から10年間にわたって行われた「矢作川森の健康診断」を引き継ぎ、地域住民の森づくりへの関心

を高めるために山主中心に取組まれたもので、全国初、センターも応援してきた。延べ350人が調査した77地点の森林は、「間伐先進地だが、超過密林もありその解消が課題」とされた。一方、旭地区において顕著な木の駅プロジェクトをはじめとした森を楽しむさまざまな取り組みは、新たな森づくりの「萌芽」であり、森林が持つ「経済的

価値」「公益的価値」に次ぐ第三の価値「暮らしの価値」といえる。この応援や参加が重要とされた。
報告会の終わりには、次回開催地の岡崎市額田地区の代表者が決意を述べ、バトンが渡された。地域自治のための健全な森づくりの取組みが流域そして全国に広がることを期待したい。(鈴木辰吉)